

講義をふりかえって

第3回, 11回, 12回, 13回, 14回担当 浜 野 保 樹

昭和59年度は、『コンピュータ社会』という15回に渡るシリーズ番組を担当したが、昭和60年度は『新しい日本学のこころみー日本的なものを求めてー』というシリーズ番組の5回分を担当することになった。

59年度と異なりテキストを制作し、59年度の反省からかなり早くから準備にはいることができた。筆者も、テキストの一部を執筆した。

I. 番組の基本方針

番組については、筆者なりの方針を立てて望むことにした。

- ・双方向の機能を活用すること：H i - O V I S は、世界で唯一の完全双方向機能を有したCATVなので、その機能を活かした番組構成とする。

- ・映像を多用すること：59年度も映像を多用するように努力したが、機材やスタッフの面で計画どおりにいかなかった。本年度は、利用可能な既存の映像をできるかぎり活用することにした。また、映像分野の方を中心に出演していただいた。

- ・学習すべき概念や歴史などはテキストに依存して、番組では学習内容に関する具体例を示すこと：イギリスのオープン・ユニバーシィーの『マス・コミュニケーション』関係コースのテレビ番組では、テキストで僅かな指摘しかない映画制作の部分に30分番組を3回充てている。そのテレビ番組の内容は007シリーズのイギリス映画『私が愛したスパイ』の制作過程をドキュメンタリー・タッチで紹介したものである。教育番組というよりも、娯楽番組の感覚で視聴できる作品である。学習者の興味関心をテレビというメディアの特性を活かして高めているのである。また、言葉にしてしまうと無味乾燥な抽象的概念を、興味ある実例で示して身近なものとして認知させることができる。

- ・第一線で活躍している方をゲストとして出演していただくこと：研究者をゲ

ストにして概念を解説するだけならば、文字で十分なので、テキストに紹介してある事例などを実際に担当している方に登場していただいて、生々しい体験談を交じえて単なる知識に終わらないように努めた。

- ・H i - O V I S に関係ある事象を盛りこむこと：筆者が担当している番組は、メディアに関する内容が中心なので、H i - O V I S について事あるごとに織り込むことにした。H i - O V I S というシステム自体が非常に興味あるものなので、視聴者にH i - O V I S からメディアを考えるという視点を提供したいと考えた。

- ・1本1本が独立した番組であること：学習の累積効果を期待する学習内容は、自主的な視聴に依存している放送には不向きである。従って、番組を独立した内容にした。

Ⅱ．番組の構成

今回の番組タイトルと出演をお願いしたゲストの方々は、以下の通りである。

第3回 「演じる：映像に見る日本人」

木下恵介氏（映画監督）

第11回 「装う：美は力か」

第12回 「撮る：カメラを通して見た日本人」

織田明氏（日本シナリオ作家協会事務局長）

第13回 「知らせる：変革期にきた放送界」

鈴木健次氏（日本放送協会生涯教育部チーフプロデューサー）

第14回 「繋ぐ：テレコンピューティングは社会を変えるか」

なお、第3回はテキストでは「装う」となっているが、木下氏の都合により、放送は「演じる」の方を先に行なった。第13回に出演していただいた鈴木健次氏は、H i - O V I S の紹介したことで知られているトフラー著『第三の波』を翻訳された方でもある。

Ⅲ. テキスト

テキストについては、番組開始前までに制作しなければならないという、時間的拘束と製作費の問題があって、ワープロ・オフセットの形態になった。教育内容をテキストに依存することにしたことと、割当て頁数の関係から、筆者が担当した個所は文字ばかりになってしまった。写真などを多用したかったが、実験という性格上著作権の費用が負担できず、掲載は不可能であった。

これまで、放送教育開発センターが実施してきた調査によって、テキストをそのままを放送で行うと、受講生の評価が低下するし、逆に、テキストから番組内容が離れ過ぎても不評を被っている。テキストに書いてあることを番組で読み上げるということは論外にしても、テキストと放送内容がまったく同じではメディアを複合して利用する意義がないことはいうまでもない。まったく同じなら、手元に残って知識を確認できるという意味でテキストの方が優れた教材であろう。

今回は、あえてテキストと番組内容を異なるものにした。テキストと番組内容が掛け離れている場合に受講生の評価が低いのは、マルチ・メディアによる学習に受講生が不慣れなためであると、これまでの調査結果を筆者なりに解釈したためである。放送教育開発センターで開催したシンポジウムにおいても、年齢によって番組の好みが異なり、若い層ほど映像資料を多用した番組を好むことが明確になったが、そのことも、先の調査結果と関係していると思った。

これまで、テレビ番組による学習経験は、NHKの教育番組の視聴が基盤となっているにちがいない。教育テレビのイメージはNHK教育であるといっても過言ではない。NHKは放送局であるため、番組が主であり、テキストは補助教材にすぎない。テキストがなくても、番組だけでも学習できるようになっている。しかし、今回の「Hi-OVIS市民大学」の場合は、テレビ番組が主でテキストが従であるという立場を捨てることにした。勿論、テキストが主でテレビ番組が従であるわけでもない。マルチ・メディアの教育に関する実験であるため、メディアを複合して初めて理解できるようにしたいと考えた。

しかし、テキストだけを読んでも理解でき、番組だけでも学習できるようにしている。テキストから事例は除き、テレビ番組から基礎的な学習内容は除いている。

Ⅳ．番組構成

H i - O V I Sで生放送したものを、ビデオ録画し他のCATV局でも放送するということになったため、完パケの番組のような構成をとらざるをえなかった。このことが、番組構成の柔軟性を阻害したことはいえない。

例えば、番組途中でテンキーでアンケートを取りたいと思いついても、後のCATV利用を考えれば、最初の構成案を乱す行為は避けなければならない。前年度のような自由度は減少した。一定のまとまりを意識しながら、話だけで番組を維持することは、卓越した話術が必要であることを痛感した。そういった技量をだれでもが持っているわけでないので、やはりトーキング・ヘッドで面白くすることは難しいことを再確認した次第である。

昭和60年度の実験でも、スタジオ聴講生の制度を取っており、このことが話の反応を確認する良い手立になった。筆者に限っていえば、昭和59年度よりもスタジオ聴講生の数が多く、20人を越える場合もあったと記憶している。番組をよくする手立としてスタジオ聴講生の制度を考えると、10人くらいが反応を把握するのに適当な規模であると思った。

Ⅴ．全体的な感想

昭和60年度の実験を担当して感じたことを、未整理のまま以下に書いておく。

●著作権

映像に関する内容であったため映像を利用しなかったが、著作権の問題で使えなくなるケースが大半であった。織田明氏が松竹のプロデューサー時代に制作した『八墓村』や『事件』などは、映像を準備していたが、直前になって使用できなくなった。やむをえず、織田氏所有のポスターに切換えた。

全国のCATV局で放映するために著作権処理が必要だし、作者の権利を守

ることがいかに重要であるかいうまでもないことである。しかし、製作費が限られている教育番組については、特段の処置がなされない限り、「映像を多用した番組」などと言うことは「絵に書いた餅」であると痛感した。

アメリカでは映像資料を著作権を含めて公共的なアーカイブに寄贈するケースが多く、そこで収集されている映像資料については、公共的な使用目的を有する場合、著作権処理をしなくても利用できるようになっている。日本では、映像資料の扱いについては、営利的な目的の処理についてだけ、検討されており、そのことが公共的な使用を抑制するように作用しているように思われてならない。今後、公共的な利用を促進するために、その方面の検討が必要であると痛感した。

●双方向機能

H i - O V I Sのような完全な双方向の機能は、現時点では一般のC A T Vでは望むべくもないが、家庭以外の利用では実験レベルで色々利用されているようである。

- ・筆者が今年3月に訪問したアメリカ、ミネアポリスの小学校でも、双方向C A T Vで3つの小学校を結んで授業を行っていた。
- ・筑波研究学園都市では、今年から双方向C A T Vで小学校を結んだ実験を行う予定である。
- ・長野県諏訪湖周辺のレイクシティ・ケーブルビジョンでは、老人ホームと病院を結んで遠隔診断を実施している。

これらは、H i - O V I S実験の波及効果の一つであるといえるであろう。一般家庭については双方向C A T Vの導入は、費用的にまだ先のことになるだろう。しかし、他のメディアを併用することで、一方向性のC A T Vでも音声や文字の双方向機能を確保することは可能である。C A T Vはサービス・エリアが放送よりも限定されるため、電話やパソコン通信を併用すると一方向のC A T Vを擬似双方向C A T Vとすることが可能である。特に、パソコン通信を利用すると瞬時にデータ処理が可能となり、市販のパソコンでH i - O V I Sの専用キーボードによるアンケート調査と同じことができるようになる。

一方、H i - O V I Sのように映像の双方向を維持することは、既存のメディアを併用するぐらいでは不可能である。しかし、映像の双方向機能については、H i - O V I Sの2回の実験を通じてかならずしも必要でないのではないかと感じることもあった。映像の双方向機能を活用できなかったから、そう感じたのかもしれないが、成人を対象とした教育の場合、映像の双方向を利用するのは質疑応答だけであって、それ以外の利用は限られている。質疑応答によって、映像がもつ意味というのは、受講生の表情だけであろう。教壇に立った経験を持つ者は、学習者の表情で理解の程度が推察できるものである。また、服装や身形から受講生の社会経済的背景もある程度理解でき、それらも学習者を理解する上で重要な情報となる。それらの情報を得るために双方向の映像情報は役立つものの、これらの情報は他の手段でも獲得できる。

家庭から教えあう場合などは、映像の双方向は必要になるかもしれないが、その場合もスタジオに出向けばよいことである。今回の実験でも、H i - O V I Sモニターの中には、スタジオに足を運んでスタジオで聴講したい方もいたということを聞いている。CATVは、サービス・エリアが狭いため、スタジオが比較的近いところにある。特にH i - O V I Sの場合は、極めて近い。近ければ出席することも不可能でないため、よけいに映像双方向の必然性が少なくなる。

映像の双方向性機能があればあるにこしたことはないが、費用効果からすれば音声や文字だけでもやりとりできればかなりのことができるであろう。アメリカでは「テレトレーニング」といって、電話会議システムによる教育が定着しているが、音声だけでもある程度の教育は十分可能である。また、アメリカのナショナル工科大学では、映像は一方向でも電話によって音声の双方向性を維持して、教育効果を上げている。映像は通信衛星で全米に散在する加入者に配送しているが、電話を利用しているため、広域でも双方向性を維持できるのである。

映像がないと教育できないとなれば、ラジオの放送教育の存在理由がなくなってしまう。しかし、映像が学習者の興味関心をひく強力なメディアであるこ

とは間違いないところである。成人の教育の場合、映像の双方向機能の必要性については検討の余地があろう。

●メディア・リテラシー

今後の高度情報社会に対応して、人々はメディアを使いこなし、情報をうまく利用する技能を身につけなければならないといわれている。そういった能力のことを「メディア・リテラシー」とか「情報リテラー」と呼んでいるが、Hi-OVISのモニターの「メディア・リテラシー」には、驚くべきものであった。

新しいメディアが登場すると、それを使いこなせないのではないかという危機が一部の人々の中にあり、それがニューメディアに対する批判ともなっているのであるが、Hi-OVISのモニターの方々を見る限り、そういったことは杞憂であるかもしれないと感じた。

Hi-OVISの方々は、双方向CATVを実にうまく利用している。要領よく質問され、時間を無駄にすることはない。長い質問でメディアを一人じめにするということもなく、メディアの倫理を忠実に守っておられた。Hi-OVISモニターのメディア・リテラシーの高さが、Hi-OVISのシステムの優秀性に由来するものであるか、Hi-OVISモニターの特殊性に由来するものであるか興味のあるところである。

●ニューメディアの倫理

双方向CATVは開放性の強いメディアなので、一人がメディアを占有してしまうと、他の利用者が利用できなくなる。Hi-OVISで、そういったケースに直面したことがなかった。しかし、この場合も、Hi-OVISモニターの特殊性に依存しているかもしれない。今後、双方向機能を有したメディアが登場するであろうが、そういったメディアを利用する際の倫理といったことが議論されることになるだろう。

●Hi-OVISのコミュニティーの存続

Hi-OVIS終了の式典にも立ちあうことができたが、Hi-OVISを通じて形成されたコミュニティーが、Hi-OVISという媒介を無くすこと

によって、どのように変遷していくか興味あるところである。メディアを通じてコミュニティが形成されるというのは、特殊なケースではない。HAM通信でもコミュニティが形成されているし、最近ではパソコン通信を通じて国境を越えたコミュニティが出来ている。しかし、コミュニティの核となるメディアが消滅するというケースは珍しく、注目に値する事例である。

●成人学習者

Hi-OVISモニターやスタジオ聴講生は、ほとんど筆者よりも年上の方々なので、大学で教えるようにはいかなかった。成人の場合それなりの人生経験を積まれているのだが、そのことが学習にとって、プラスにもマイナスにもなると感じた。学習を経験に置き換えて実り豊かなものにもできるし、また、限られた経験で学習内容を判断しかねないからである。成人の教育方法は、青少年の教育方法と明らかにことなるのである。

わずか2年あまりの実験であったが、Hi-OVISの特定のモニターの方々とは通常の授業で知りあう受講生よりも親しみを感じる部分が多かった。受講生の方々も、講師に対してそのような感じを持たれたようであった。この点については、完全双方向のメディア故にそうなのか、Hi-OVISのモニターの特殊性なのか、放送教育開発センターの教官の特殊性なのか断定しづらいが、多分、すべての要因が関係しているのであろう。この点については、映像の双方向性の力を認めざるをえない。

最後に、こういった貴重な機会を与えていただいたニューメディア開発協会、フジエイト、Hi-OVISのモニターの方々に謝意を表する次第である。